

令和2年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立三木特別支援学校
-----	--------------

1 学校教育目標

一人一人が「輝き」、「主体的」に活動する児童生徒の育成 (校訓) 自立 元気 ともに伸びる

2 本年度の重点目標

- (1)命と安全を守り、生活年齢に応じた人権が尊重され、自己肯定感や所属感、成就感が育まれ、人権意識を高められる学校文化の醸成に努める。
- (2)個々の障害の状態や特性や発達段階等を的確に把握、課題を明確にし、合理的配慮にもとづく「個別的教育支援計画・指導計画」により、個々の持てる力を引き出し、高める指導と支援体制を確立し、学校教育目標の具現化を図る。
- (3)心身の調和的発達と個性の伸長を図るとともに、社会の一員として主体的に生きる意欲や態度、知識、技能を身につけさせる。
- (4)地域の学校や地域社会との交流、共同学習、ふれあいを通して、互いを尊重し合いながら、共に生きる意欲と態度を養う。
- (5)センター的機能の充実を図り、他校の幼児、児童、生徒の教育に関して必要な助言や支援も含めた、組織的な対応が可能な体制づくりを進める。

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
児童生徒理解	<ul style="list-style-type: none"> ○学校は家庭や関係機関と密に情報交換を行い、連携して楽しく落ち着いた学校生活への取組を進めている。 ○個別的教育支援計画・指導計画を基に指導・支援、評価を行い、指導・支援の改善に取り組んでいる。 ○チームとして職員全体で児童生徒の共通理解を図り、組織的な指導を充実させている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別的教育支援計画、指導計画の作成や活用を保護者と共通理解しながら進めた。 ・児童生徒に応じた各種検査や日々の行動から実態把握に努め、指導方法や授業内容を工夫し取り組んだ。 ・必要に応じて、児童生徒の情報交換を職員朝礼や職員会議等で共通理解した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・指導上、知り得た情報は職員全体で共通理解し、家庭や地域、学校と協力して課題解決に取り組む。 ・個別の指導計画作成時、担任を中心に手順シートを考え、児童生徒の実態把握、次の手立てや改善に向けて取り組む。 ・学校として、組織的な指導・支援を充実させる。
授業活動 日常生活の指導	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒の自立や社会参加をめざし、実態把握や検査結果等に基づいて目標設定を行い、その達成に向け主体的な学習が行えるようPDCAを意識した指導をしている。 ○授業研究を計画的に設定し、個々の指導や教師間の連携を活かして指導力の向上を図っている。 ○教材教具一覧表を常備し、保管場所や利用方法を理解のうえ適切に活用している。児童生徒支援方法の一つとしてICT活用を含めた教材研究や授業形態の研修を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実態把握をもとに自立や社会参加を意識して、具体的でわかりやすい目標設定を行い、絶えず振り返り共通理解を図りながら、指導・支援できるように取り組んだ。 ・計画的に授業研究を実施し、講師の指導助言を活かして、目標や支援の確認や振り返り等、児童生徒が主体的に活動できる授業を目指した。 ・担当教師を中心に、教材教具やその保管場所の整理整頓、ICT研修を行い、活用を促し指導に活かすように努めた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も児童生徒の自立や社会参加に向け、多方面からの情報による実態把握に基づいた目標設定、支援や指導法の見直し、検討を心掛け、最少の支援で自主的に学習できる指導をめざす。 ・児童生徒が主体的に学習や生活に取り組めるよう、引き続き授業研究に取り組み、事前事後研修を活かして指導力の向上に努める。 ・今後求められるタブレット等のICTを活用したオンラインやリモート授業など、新しい学習形態の指導についての研究もさらに進める。
道徳・人権教育	<ul style="list-style-type: none"> ○日常の様々な活動を通して児童生徒の生活年齢に応じた人権が尊重され、自己肯定感や所属感・成就感が育まれている。 ○将来社会参加するために必要な人権感覚が身に付くよう個々に応じた内容、指導方法を工夫している。 ○交流及び共同学習において、自他の人権を互いに尊重し合う人間関係づくりの指導をしている。 ○授業の中で道徳・人権教育を実践できるよう、カリキュラムを構築し、計画的に指導に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画をもとに授業や学校生活を通して人権尊重の学習を個に応じて取り組んだ。 ・校内において学習内容、指導方法を考慮しながら人権感覚が身につく学習及び体験活動に取り組んだ。(ゆうタイム、のびのびタイム、体験チャレンジ等) ・交流学习(居住地校交流や地域校交流)においては、本校及び他校の教職員間で交流内容を検討し、相互理解や人権尊重に向けた交流に努めた。 ・道徳教育の全体計画を作成するとともに、各学部において道徳を教科としてカリキュラムに取り入れ、合わせた教科指導など道徳・人権教育を計画的に進めた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・交流では、保護者の希望も踏まえ、児童生徒の実態を把握しながら、内容等十分な打ち合わせや事後のふりかえりを丁寧に行い、互いに尊重し合う交流内容を進めていく。 ・校内外の交流や学習を通して、自己理解や互いに認め合うなどインクルーシブ教育の意義をより深めていく。 ・本校の全体計画を見直し、道徳科だけでなく他教科、教科外、日常生活など学校教育全体で道徳・人権教育が根ざしていくように努めていく。
学校行事	<ul style="list-style-type: none"> ○行事の意義・ねらい・あり方を大切に、授業時間数の確保及び感染防止の観点から工夫・改善し、実施している。 ○児童生徒の自立と社会参加に向けた意欲や態度、集団の一員としての意識を行事を通して育てている。 ○日頃から保護者と情報共有し、児童生徒一人一人の特性や発達段階に応じて、個々のねらいの設定や取組の工夫を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・従来の行事で培ってきた力、ねらいを達成できるよう、行事のあり方を職員会議で検討、実施した。練習時間短縮や内容の工夫、授業時間数確保を図った。また、感染防止のため、来校者制限、検温・消毒等の策を講じた。 ・児童生徒の健康状態等を考慮し、集団の中での他者とのかわりや自分にできることを意識した活動を取り入れた。 ・当日を見据え、個々のねらいを、保護者と共有しながら、一人一人の特性や発達段階に応じて、計画的に取り組んだ。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・各行事の意義・ねらい・あり方等について、職員会議で成果と課題を十分に検討し、感染症対策とセットで全教職員で共通理解を図り、実施していく。 ・児童生徒一人一人が集団の中で他者との関わりや自分にできることを意識できる活動を取り入れていく。 ・日頃から保護者と情報共有し、児童生徒一人一人の特性や発達段階に応じて、個々のねらいの設定や取組のより工夫をする。 ・コロナ禍の現状に即し、行事の変更については、その意図やねらいについて情報発信し、保護者の十分な理解を得ながら、実施していく。
地域における特別支援教育のセンター的機能の発揮	<ul style="list-style-type: none"> ○相談活動や研修会を地域における特別支援教育のセンター的機能として実施し組織的な対応が可能な体制づくりを進めている。 ○卒業後の進路情報や特別支援学校高等部の見学の機会に関する情報を提供し、早期より児童生徒一人一人に対する教育相談を充実させている。 ○児童生徒の現在及び将来を見据えた内容の研修会を計画し、本校保護者をはじめ市内各校担当者や各校関係保護者等へも参加を呼びかけ実施している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度もコーディネーターを1名配置し、市内の学校園所や市健康増進課等と連携して相談活動を行った。センター的機能として、進路研修会と性教育研修会をそれぞれの担当者が中心になって計画し、実施した。 ・進路研修会に特別支援学校高等部と障害者総合支援センターから講師を招聘し、保護者が進路に関する情報提供を受けられる機会を設定した。 ・センター的機能として開催した2つの研修会について、市内各校担当者や関係保護者等に案内した。多くの市内小中学校保護者の参加を得た。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・感染防止に関して十分検討した上で、センター的機能としての研修会等の実施を継続する。 ・進路研修会や特別支援学校高等部のオープンスクールの案内等、保護者が進路についての情報収集ができる機会をより充実させていく。 ・特別支援学校のセンター的機能について、年度の初めや各担当者の集まりの機会等をとらえて市内学校園の教師に周知し、活用を促す。また、研修会等の案内も継続する。
家庭・地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> ○課題の解決に向け保護者と情報共有を密にし連携して取り組んでいる。 ○特別支援教育や本校の取組について周知し、理解や協力が得られる情報発信や発信継続できるシステム作りを工夫している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳や電話、懇談や家庭訪問、その他の機会に保護者と密に情報交換を行った。保護者と共有した情報を活かして家庭と学校、関係機関が連携できるように学部、学校での情報共有に努めた。 ・学校通信、学部通信、ほけんだより等を定期的に発行し、情報発信をした。継続的にホームページでの情報発信も行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き家庭との情報共有を密にし、連携して教育活動に取り組む。 ・地域に向けて本校の教育活動について発信し、地域との連携を推進する学習活動を継続する。
健康・安全指導	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒一人一人の健康や安全に関する情報を共有し、個々に応じた健康面、安全面の指導を計画的かつ柔軟に行っている。 ○学校通信や学部通信、保健だより等で、健康や安全に関する情報を発信している。 ○児童生徒の実態に応じた保健に関する研修を実施している。 ○多様な場面を想定し、緊急時の避難や誘導を安全に行えるよう、全体や個別に対応できる実践的な研修や訓練を行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は、感染症予防を中心に行政からの指導事項を教職員間で共有した上で、健康・安全面の指導を計画的に行った。集会や日々の指導を通して、児童生徒が手洗いやマスク着用など感染症予防の基本を身につけられるよう努めた。 ・保健だより等で、感染症予防や季節に応じた健康への留意点について発信した。 ・保護者や教職員に対して児童生徒の実態に応じた保健に関する研修を計画的に実施し、理解を深めた。 ・コロナ禍における避難・誘導訓練や、実際の場面を想定した緊急時の救急救命訓練等に取り組んだ。また、緊急時の連絡・救急体制に関する研修を行い、全職員の共通理解を図った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の実態に応じた学校における健康面、安全面の確保について研修を継続して行う。学校通信や保健だより等で、健康・安全面に関する留意点や取り組みを引き続き発信する。 ・多様な場面を想定し、緊急時の避難や誘導を安全に行えるよう研修・訓練を継続して行う。また児童生徒の危機管理能力を高めるために、より実践的な訓練及び教育を行う。
施設管理 教育環境整備	<ul style="list-style-type: none"> ○定期的な安全点検等を実施し、計画的・長期的に児童生徒の安全安心な教育環境づくりに努めている。 ○児童生徒の実情を把握し必要な機器等の整備や管理等に計画的に取り組んでいる。 ○感染症予防にかかる備品等を整備し、消毒作業等を組織的、継続的に行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1月1回安全点検を実施し、必要な整備並びに修繕に努めた。本年度は、小学部女子トイレの洋式化や各学部のトイレにエアコン、網戸の設置等、児童生徒の実態に合わせた整備を実施した。 ・教材リストや貸出簿を活用し、必要な機器の保管場所を明確にすることで効果的な活用につなげた。 ・非接触型のサーモカメラや体温計、パネル、自動水栓などの整備とともに、毎日、消毒作業を行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の老朽化により必要な修繕箇所計画的に取り組む。 ・現在ある機器や教具の保管箇所を整理し、さらに活用しやすい環境づくりに努める。また、毎年変容する児童生徒の実態に即した機器、教材整備を進める。 ・職員員の負担軽減を図りながら、感染症防止に継続的に取り組むとともに、必要な備品等の整備に努める。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・保護者と教職員のアンケート項目について整合性が図られており、的確な自己評価ができています。全体的に保護者が教職員の取組を好意的に受け止めており、教員も意欲的に取り組んでいると感じられる結果である。しかし、どの項目についても保護者の意識は低く、教職員の意識は高いという傾向があり、その差を縮めるための具体的な方策を、より見えるようにしてほしい。

・アンケート結果を見る限り、全項目ともABの合計は97～100%である。数値だけにとらわれず、少人数でもCがある項目や保護者の自由記述(マイナスの内容)等も考慮していく必要がある(同じAでも課題がありBに近い等)。児童生徒や教育活動の現状と照らし合わせながら、より総合的な評価となるよう検討を継続していく必要がある。

・達成度の4段階評価について、どこまで取り組めたら達成なのか、達成の指標が保護者にとってはわかりにくい点が見られる。アンケート対象数から割合(%)の表示と合わせて実人数で表記していくと保護者にもイメージがしやすいと考える。(例 A:18人(90%))

・保護者と教職員の温度差を感じる。研修を重ね、懸命に努力を重ねても、保護者の望む支援と違う場合、評価は低くなる。信頼関係が大事であり一方通行にならないように時間も大事に家庭や地域との、より丁寧な連携や共通理解を大切に教育活動を展開して欲しい。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価

学校自己評価の8観点についての自己評価結果は概ね適切である。

・学校通信「輝き」、小学部通信「のびっこ」、中学部通信「みちるべ」など、学校からの情報発信で、保護者や地域との関係づくりができていていると思われる。

・さらにコロナ禍での1年間、感染防止のための対策と教育活動の充実を両立させるために、様々な苦労や悩みが山積したと思われる。しかし、この1年を通して、教職員、保護者、地域の関係者等の心のつながりは、よりいっそう深まったのではないかと。今後も、このような姿勢での取組を、ぜひ続けてほしい。

・働き方改革は、意識を変えて、わりきること必要である。事務の効率化が図られるとよいと考える。

・アンケート結果による数値のみの評価では、すべてA評価であった。総合的に判断してB評価とし、来年度の課題とした観点がある。

(1)児童生徒理解

・一人ひとりの児童生徒に丁寧に向かいあわれている様子がうかがえる。保護者、教職員ともにC評価があるのは、個々に気になる点があるのではないかとと思うが、改善の方策に取り入れられていてよい。

・児童生徒の実態を把握し、個々に合わせて、できるようになるための指導計画をたて、実践されていると思う。

・職員全体で共通理解することが大事である。家庭と同じ支援をすることが、本人の混乱を防ぐので、家庭との共通理解は特に気をつけてほしい。

・学校、家庭、各関係機関との連携や情報を共有し、児童生徒一人ひとりが楽しく落ち着いて学校生活が過ごせるよう個別の教育支援計画、指導計画の作成や活用を保護者と共通理解しながら、引き続き進めてほしい。

(2)授業活動、日常生活の指導

・コロナ禍ということもあるが、それがきっかけとなり施設でもICT活用に取り組んでいる。児童生徒の可能性を大きく広げるものであり、将来的に、児童生徒が成人し、社会人となるまで切れ目のない支援につなげてほしい。

・ICT教育ともなると特に学習計画を立てるのが難しいと推察される。上手く活用すれば、視覚的、聴覚的な効果が高いと思われるので、児童生徒に思わぬ学習効果が表れるかもしれない。個々に合った活用方法の工夫を期待する。

・児童生徒理解と共通することが多い。「教育」の場と家庭での「躰」は似て非なるものである。境界線が必要である。

・今後も児童生徒の自立や社会参加に向け、多方面からの情報における実態把握に基づいた目標設定、支援や指導法の見直し、検討を心がけ、最少の支援で自主的に学習できる指導法を旨としてほしい。

・昨年度より保護者の評価は低下しており、逆に教職員の自己評価は高い。ひとりよがりの指導になっていないか、保護者との対話を重ねるなどして、原因はどこにあるのか見極めて指導に生かしてほしい。

(3)道徳、人権教育

・道徳的視点、人権的視点ともに全ての教育活動にわたって根幹となる、とても大切な視点である。

・保護者も一緒になって道徳・人権教育に触れる場が増えると評価ももっとあがると思う。

・三木市は交流を早くから取り入れてきた。三木市の障害者雇用率は、国が示す倍ほどの数値があるのは地域の理解が根付いてきている証と感じている。だからこそ、交流教育は慎重に進めるべきである。相手の立場に立った交流をするためには引率される先生の支援が重要である。当日の現場で混乱が起きることがないように、慎重な準備を行い、双方が将来、益となる交流をのぞむ。

・人権感覚を培うキーワードは、人と人との交流にあるといっても過言ではない。そういう意味で、学校は交流を中心に命や人権の大切さを伝えようとしていることが伺える。但、今年度はコロナ感染に気をつけながらということで、他との交流が十分に行えなかった様子である、今後の交流の持ち方についての再考やインクルーシブ教育にも期待したい。原点にかえて、足元の日常生活を見直しながら取り組んでほしい。

(4)学校行事

・新型コロナウイルス感染拡大防止に努めながらの取組は大変だったと思うが、児童生徒も新しい生活様式を身につけながら、いろいろな活動ができたのではないかとと思われる。

・コロナ禍で制限される面は多いが、児童生徒が達成感や満足感が得られるよう工夫してほしい。

・コロナ禍にあって行事の形やスタイルも変わってきている。しかしながら行事を縮小させてしまうのは惜しい。今後も柔軟な対応をのぞむ。

・今年度はコロナ禍のため、ほとんどの学校行事が校内のみで行われた。その中で例年は1月に実施する学習発表会が11月に実施された。寒くなる前にというコロナ対策がうかがえた。また保護者だけでなく地域の関係者も密状態にならない人数と座席配置で招かれ、子どもたちの演技を楽しんだ。小学部も中学部も教職員によるオリジナル作品で、子どもたち一人ひとりの特性が生かされたキャストイングとなっており、どの子も表現の喜びに輝いていた。

(5)地域における特別支援教育のセンター的な機能の発揮

・コロナ禍の中、感染対策を行いながら個別の教育相談等は実施できたが、対象の児童生徒との十分な距離をとることが難しい各種訓練会や不特定多数が集まる共生フォーラムは中止せざるを得なかった。地域における特別支援教育のセンター的な機能の発揮の方法を、さらに試行錯誤、工夫してほしい。

・進路相談や教育相談について教職員の評価は非常に高いが、それに比べて保護者の評価はとても低くC評価も数名いる。保護者の進路への不安がうかがわれる。進路研修会や特別支援学校高等部のオープンスクールの案内等、保護者が進路についての情報収集ができる機会を、より充実させてほしい。

・共生フォーラムの実施なども、コロナの状況等、事情が許せば、来年度は是非考えてほしい。

(6)家庭・地域との連携

・地域の人たちと共同で何かを行うことが難しい中、工夫して取り組んでいる。フェスティバル等の行事が復活できれば連携も取りやすくなる。

・学校通信等の定期的な発信は貴重な情報源である。他の特別支援学校でされているユニークな活動や取組があれば教えてもらいたい。

・ネットを使った情報発信や連携など、まだまだ可能性は広がる。試行錯誤しながらの取組の改善を期待する。

・家庭との情報共有の方法を再確認、工夫し、これまでの方法に拘らず、その手段も含め柔軟な対応をのぞむ。

・連絡帳や電話、懇談や家庭訪問など保護者と密に情報交換を行い、共通理解に努めている。引き続き家庭との情報共有を密にし、連携して教育活動に取り組んでいただきたい。

・地域に向けて教育活動について発信し、地域との連携を推進する学習活動に今後も継続して取り組んでほしい。

・マスクがつけられるようになるなど、家庭ではできないことを学校で教わったり仲間から刺激を受けたりするなど学校にしかできないことがある。それらについての指導の充実を期待する。

(7)健康・安全指導

・新型コロナウイルス感染症だけでなく、通常でも健康管理、安全に配慮しなければならないことが多いが、一つ一つ丁寧に取り組んでいる。

・コロナ感染予防に教職員が消毒等に努めている点がすばらしい。

・設備面でも改善され、よい教育環境になっていっていることは、児童生徒、家族、教職員等、みんなにとって意義がある。

・今は十分すぎると言っていいほど指導はされていると思う。毎日、児童生徒の健康安全への気くばりは大変だろうが、継続して取り組んでほしい。

・コロナ禍にあって、緊急時も多様化している。「緊急持ち出しシート」を配布している施設もある。万が一、児童生徒が取り残されることがないように、普段から想定して準備をすることも大事である。

・児童生徒ひとり一人の健康や安全を基本に個々に応じた指導を計画的かつ柔軟に行い学校生活を進めてほしい。

・コロナ禍における避難、誘導訓練や実際の場面を想定した緊急時の救急救命訓練は効果があったと考えられる。引き続き、多様な場面を想定し、緊急時の避難や誘導を安全に行えるよう研修や訓練を行ってほしい。

(8)施設管理・教育環境整備

・保護者、教職員ともに昨年度より評価もあがり、安心できる教育環境を整えている。

・予算の問題もあることと理解している。しかし、マンパワーで解決できることもあると思う。期待している。

・安全、安心の施設・備品・教具は最高の教育環境だと言われる。コロナ禍での様々な感染防止対策、学校施設面へのすばやい対応なども教育環境整備につながる。さらに、地域の人材からの協力、支援など人的教育環境整備も含めて、今後も、きめ細かな心温まる教育環境の整備を続けてほしい。